

成田 夜雨（なりた・やう）

1、プロフィール

若くして洪茶会に参加。荻原井泉水主宰「層雲」の弘前支部などに拠り、自由律の俳句作りや編集に携わった。後に鷹の会を主宰、自由律俳句一筋で、長きにわたり活躍した。

<生没>

1884(明治 17)年1月 20 日 ~ 1970(昭和 45)年8月 13 日

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。層雲弘前支部などに拠り、後に鷹の会を主宰。その指導者として隠然たる位置にあった。

2、作家解説

俳人。明治 17 年弘前市徒町川端町に生まれた。本名は直道。和徳尋常小学校に入学し、青森県第一尋常中学校にすすんだ。第一中卒業と同時に上京し明治法律専門学校(後の明治大学)に籍を置いたが、間もなく胸部疾患のため帰郷し、療養生活に入る。

明治 39 年頃から句作に親しむようになる。当時、弘前では新派俳句が盛んであったが、若手の竹内竹童、前田冬川、柳田柳子、竹内呉竹らに、直道は夜雨の句号で加わり洪茶会をつくる。41 年には、弘前俳句会の機関誌として「洪茶」が創刊されるが、第2号は発売禁止となる。第4号の時、事務所は夜雨方に移り、夜雨は事実上の責任者であった。

明治 40 年に河東碧梧桐の来県、大正元年には荻原井泉水の来弘があった。その時夜雨は碧梧桐に伴って嶽温泉に遊び、井泉水は夜雨宅に三泊した。大正6年、井泉水が興した「層雲」の弘前支部を設立、夜雨ら元洪茶会のメンバーがこれに名を連ねた。

大正元年から角弘青森支店に勤務し、同3年に結婚、青森で借家生活をした。「層雲」弘前支部は、7年に群青社、13年には群星社となり、15年には太平会、群青社、群星社を統合して第二次無名会を結成する。この頃、弘前の角弘本店に転勤し、妻とともに川端町の生家にもどる。

昭和6年に、井泉水が再び来県。これをきっかけに鷹の会が発足し、機関誌は自由律を標榜する。10年、長女出生とともに独立し、田代町の新居に移る。鷹の会の例会は、ほとんど夜雨宅で行われ、夜雨はその指導者として隠然たる位置にあった。34年、戦前から戦後へ「鷹」を育て見守ってきた夜雨の喜寿を祝う会が弘前の南柳荘で催された。これを契機に、35年から年刊句が出されるようになる。

昭和45年8月13日、静かに逝く。行年87歳。「鷹」165号は、夜雨追悼号となった。「夜の雨やんで老鷹遠く逝く」(坪田凡)「鷹」は、49年3月、187号でその幕を閉じる。

3、資料紹介

○「鷹」165号(成田夜雨追悼号)

図書

1970(昭和45)年9月30日

258mm×192mm 42頁

昭和45年9月30日、鷹の会発行。池原魚眠洞ら12人の追悼文、河津修ら4人の追悼句、魚眠洞ら22人の弔句などが収められている。生前の夜雨の姿を様々な角度から伺い知ることができる。